

登場人物

語り

太宰治

雛菊・・・金華楼の芸者

駒鳥・・・金華楼の芸者

津島修・・・縁恩大学文学部 現代文学史教授

山科文加・・・津島ゼミの学生

谷崎順子・・・津島ゼミの学生

喜子・・・喜久屋の女将

船越・・・出版社の編集者

衣香・・・薬屋を営む女性

川奈部香織・・・鍼灸師

夢乃・・・花魁

中原中也

井伏鱒二

釣り堀の親父

川端康成

山崎富栄

通りすがりの男性

正木凜・・・縁恩大学人類工学科・脳科学部助教授

喜絵・・・喜久屋の二代目女将 喜子の娘

易者・・・街の辻で出会った占い師

通りすがりのご主人

トラック運転手

● 其の一

語り「時は昭和22年、ここは吉原の遊郭 金華楼（きんかろう）」。にぎわう花街の喧騒に混じって聞こえてくる、遠い小唄と三味線の調が古き良き日本の風情と申しましょうか、二度と取り戻すことのできない儂くも美しい人生の象徴の様もあり、私など聞きたびにそつと涙をぬぐうような始末でございます。まさにそんな短くも、色も味も濃く太ーい人生を生きた昭和の天才の一人がこの物語の主人公でございます。男の名は太宰治。本名は津島修治（しゅうじ）。青森の名家に生まれながら、それ故に波乱万丈に生きた暗ーい暗い小説家というのが一般的な認識ではございますようが、真実は小説より奇なりと申します。はてさて真（まこと）の姿は如何ばかりか、まずはとくにご覧あそばせー（拍子木）

金華楼。大騒ぎの宴席。

雛菊「いやーだもう！太宰さん、そんなとこ触ったらいけずやわー！」

太宰「待ーて待て待て待てー！あははははは、愉快愉快！雛菊のお尻はかわいいなー！」

雛菊「もういい加減にせんと、奥さんに言いつけますよ？」

太宰「がーん、君、それは無しね、それは。僕には奥さんなんていませーん！（笑）」

駒鳥「（笑）嘘ばかり！太宰さんて本当楽しいわ！あんな暗い話ばかり書いてるくせに！この嘘つき！」

雛菊「ほんまほんま！嘘ついたら針千本のーます！キャハハハ！」

太宰「やられたー！あははははは・・・はあ、疲れたねえ、飲み直そうか」

駒鳥「そうしたらお爛してきましょ」

太宰「ああ、いいよいいいよ、冷のままで」

駒鳥「そう？したら、どうぞ」

太宰「ありがとう、おつととと・・・うまい、実に旨い」

雛菊「新しい小説読みましたよ。斜陽、なんだかすこーし怖かった」

太宰「そうかい？でも、ありがとう、読んでくれて」

雛菊「ねえ、太宰先生？」

太宰「なんだい？」

雛菊「先生は、本当はなにものなん？うち、ようわからんわ、先生の事」

太宰「ははは、そうか、わからんか。そうか、そうか」

● 其の二

縁恩大学、津島修教授の研究室。

居眠りする津島を起こす学生の声。

文加「先生！起きてください、先生！先生ってば！」

谷崎「そんなんじや駄目よ。見てなさい。津島せんせー！朝ですよー！」

津島「わ！びっくりした！・・・なんだ君たちか」

谷崎「君たちかじやないですよ、まったく。研究室で寝ないでくださいって、あれほと言ってるのに」

津島「すまん、すまん、研究が忙しくて」

文加「昨日も泊りですか？」

津島「ああ、どうせまた朝になればここに来るのにとすると、通勤時間がもったいなくてつい・・・」

文加「気持ちは分かりますけど、風邪でも引いたら。あら？また太宰治ですか？」

津島「ああ、それがまた面白い資料を見つけてね」

谷崎「なんですか？」

津島「これこれ、これ見て。なんと太宰治をもてなしたことがある元芸者さんのインタビュー記事、ほらここ、このページ」

文加「え？昭和45年の雑誌？ちよつと待って、どこですか？えーと、なになに・・・私が吉原の芸者時代、太宰治先生は頻繁に遊びに来てくださいました。

へー、貴重なインタビューですね。よく残ってましたね」

津島「いいから、その先、その先読んで」

文加「はいはい、えー・・・太宰治先生は、暗くて神経質な人柄だと思われがちですが、本当はたいへん明るくて楽しい方でした、だって！すごいじゃないですか？」

津島「だろう？やつぱり僕の推測は間違いじゃなかったんだ。太宰治はやつぱり、陽気な男だったんだよ！」

語り「この男、縁恩大学文学部・現代文学史教授、津島修。三度の飯より太宰治が好きという変わった人物で、日夜、太宰治の研究を続けているのであります。彼の代表的な論文のタイトルは、“文学における作家と作品の形而上的考察”であります。意味不明ですって？要約するならば、作品が必ずしも作者の人格を表しているわけではないという内容なのですが、学界では今一つインパクトが無かったようで、それでも何故だか彼は、太宰の人格イメージに不満があるようにして・・・」

谷崎「おもしろいですね。でも先生、今日はこれから他の題材についても発表し合う予定ですよ。ゼミまでもう30分しかありませんよ」

津島「わ！しまった、いけない、もうこんな時間だ、いくつか急ぎのメールがあったんだ！あ、その前にみんなに配るプリントをコピーしなくちゃ！ギャ、コーヒーこぼれた！痛て！肘ぶつけたよー、わ、わわ、わー（ドンガラガッシャーんと椅子ごと倒れる）」

文加「津島先生！大丈夫ですか！？」

谷崎「ほっときましょう、いつものことだから」

文加「でも・・・そうね。じゃあ先生、またあとで」

津島「はい・・・またあとで・・・とほほほ」

### ●其の三

語り「ところ変わって昭和10年、先ほどよりも若い自分の太宰治が行きつけにしていた小料理屋「喜久屋」でございます。呑んで騒いで喧嘩して、金もないのに毎晩のように大酒を飲んでおだを上げる始末でございます。今夜もなにやら一波乱ありそうでございます」

喜子「いつらっしやいまし！悪いわね、そこちよつと詰めてあげて」

船越「だったらもつと真剣に小説を書き給えよ！才能がもったいないと思わないのか！？」

太宰「何を偉そうに！そんなに分かったような口きくなら、お前が書け、お前が！優秀な文藝社の編集者なんだろう！？」

船越「いくら優秀な編集者だろうと、君のような女たらしの飲んだくれに付き合える人間などいない！もうたくさんだ、失礼する！」

太宰「行け行け、どこでも行っちまえ！そのかわり、今月の原稿が落ちる責任は自分で取りたまえよ」

船越「なんだと！・・・どこまでも性根が腐ってるんだ、君って男は・・・」

太宰「純粹だと言ってくれ」

船越「誰が！？だいたい世間は君のような男に甘すぎる・・・悩み多き繊細な青年だと勘違いして、君の数々の愚行さえ美化する始末だ。無頼だ、デカダンだと賛美する評論家もいるが、俺は騙されないぞ！不幸の振りした幸せ能天気男が！」

太宰「言いやがったな！そりゃ！（笑）」

船越「貴様！」

取っ組み合いになる二人。

喜子「こら、二人とも！やめなさい！もうやるなら、外でやんな！そとで！」

太宰「止めてくれるな、女将！これは俺の大事なスキンシップだ！それ！」

船越「いたたた！女将、こいつをやっつけたら壊した物はきっちり弁償する、今は止めないでくれ！おりゃ！」

太宰「うわー！（ガシャーン）」

衣香「いたい！ちよつと、何すんのよ！（パシャーン！酒瓶で太宰の頭を殴る）」

太宰「ウグッ！・・・やりやがっ・・・た・・・な・・・（バターンと倒れる）」

船越「太宰！おい、太宰！」

●其の四

語り「隣り合わせた見知らぬ女に、酒瓶で頭をかち割られた太宰は、近くで薬屋を営みその女の店に担ぎ込まれて、生憎薬は売るほどあつた上に、警察沙汰にするのも野暮だつてんで居間に寝かせておりますと、しばらくして目が覚めたように開口一番」

太宰「いい女だなあ」

衣香「（カーン、鍋で頭を再度殴る）」

語り「起き抜けにも関わらず、女の手を握ったりしたもんだからさあ大変、元来気の短い薬屋の女主人、名は衣香と申しますが、そこらにあつた手鍋を手に太宰の頭をもう一度クリンヒット。もう一度気を失う始末と相成りました」

太宰「うーん・・・ここは、どこだ？」

衣香「目が覚めた？小説家先生」

太宰「君は？・・・ああ、酒場で喧嘩に乱入してきた」

衣香「乱入だなんて。私は被害者よ。久々に頼んだ大好きなクチコが台無しよ」

太宰「それはすまなかった。今度、また頼んだらいい。僕がご馳走するから」

衣香「なんであんだと酒を飲まなきゃいけないの？会ったばかりだと言うのに」

太宰「会ったばかりな気がしないのは何故だろう？もしかして、以前どこかで？いや、もしかして未来に会う約束でもあるのじゃないかな？」

衣香「訳の分からない口説き方ね。とにかく目が覚めたなら帰って・・・手を放して」

太宰「いや放さない」

衣香「また殴るわよ」

太宰「いいさ、殴れよ。そうすれば、また君の布団で眠ることが出来る」

衣香「・・・馬鹿な事を言わないで・・・警察を呼ぶわよ」

太宰「警察を呼んだら君が僕にふるった暴力を打ち明けるよ。それに、男を家にあげている女の貞操を奴らは重んじてくれるだろうかね？」

衣香「はぬん！（太宰を平手打ちしようとする）」

太宰「君に惚れた。すまないな（抱き寄せて接吻する）」

衣香「うう！・・・ん・・・ん・・・やめて！（平手打ち）」

津島「いたっ！」

香織「びっくりした！ごめんなさい、痛かったですか？でも津島先生、てっきり寝ているもんだと思ってました」

津島「いや、このマッサージを受けてると、なんだかいつも不思議な夢を見るんです。今日のはこれまたリアルだったなあ」

香織「クスッ、どんな夢だったんですか？」

津島「え？いや、それはまあ・・・」

香織「あやしい。エッチな夢ですか？」

津島「(咳込む) 馬鹿な、そんなわけないでしょう・・・太宰が酒場で編集者と喧嘩している夢を見たんです」

香織「太宰って先生の研究してる太宰治？マッサージの時ぐらい仕事を忘れたらどうですか？」

津島「ちよつと待って！・・・君、なんだかさっき夢に出てきた女性に似ているような・・・」

香織「女性？ははあ、やっぱり」

津島「誤解しないでください、僕は別に・・・」

香織「ふふふ、変な先生。それ！」

津島「いたー！」

## ●其の五

遊郭。

花魁(おいらん)の夢乃に会いに来た中原中也。

中原「僕みたいな人間が生きていて、何になるっていうんだ？ねえ、君、そうは思はないか？」

夢乃「さあて、あちきなんぞ年増の花魁には、とうてい分かりはしませんえ」

中原「劳咳で酒狂い、どうしてこんな性分に生まれてしまったのかな」

夢乃「業でありんす」

中原「業？どんな」

夢乃「才能のある人は、その代償として不幸になるよう出来てます。それが宇宙の真理でありんす」

中原「珍しいことを言うな。誰に聞いた？」

夢乃「太宰さん」

中原「太宰？」

夢乃「あちらはよく笑う子供みたい人ですけど・・・あんたとよく似てる」

中原「ふん、あんな軽い男・・・」

夢乃「死なんですね。あんたも、太宰さんも」

多摩川の土手。

井伏鱒二と釣りをする太宰治。

井伏「釣りで大切なのはなんだと思うね？太宰君」

太宰「そうですね、やっぱり忍耐じゃないですか？」

井伏「（笑）普通はそう考えるな。だがまったく逆」

太宰「逆？」

井伏「そう、釣りで肝心なのは攻めることだ」

太宰「攻めるって、竿と糸で何をどう攻めるっていうんですか？」

井伏「まずは天候を見て、常に水の流れに気を配り、浮き下の長さを調整し、餌を吟味し」

太宰「ずいぶんせつかちなものですね。僕はてっきり釣りなんてものは気の長い老人の趣味だとばかり」

井伏「それも逆。釣りには気が短いほうがいい。釣れないでじっと待つより、あーでもないこーでもない」と試行錯誤する方が上手いくものだ。ある意味小説と相通ずるものがある」

太宰「へー、なるほどねえ。あーでもないこーでもないか」

井伏「そう。あーでもないこーでもない（笑）」

そこに夢乃が通りがかる。

夢乃「太宰はん？まあ、井伏先生も。お珍しい二人やわ」

太宰「おお、夢乃。お前もこっちに來てやったらどうだ？」

井伏「それはいい、私の竿でやるといい。私はちよつと一服だ」

夢乃「（笑）そうしたら、ちよつと遊ばせてもらいましょ」

太宰「どうぞどうぞ」

夢乃「懐かしいわ、釣りなんて」

太宰「やったことあるんだ？僕は二回目」

夢乃「したらあちきの方が経験豊富やわ。子供の頃、父ちゃんとよく」

太宰「ふーん。父ちゃんはどんな人？」

夢乃「父ちゃんはね、渡し船の船頭でした。うちが7つの時、労咳でうなつたけど、優しい父ちゃんやつたから、大好きでした。大酒のみで借金だらけで、だれどいつも明るくて楽しい人でした。よう考えたら、太宰はん、うちの父ちゃんみたい」

太宰「僕が？そりや光榮だな。僕もいつか父親になり日が来るだろうかね？」

夢乃「きつとええお父さんになりますよえ」

太宰「だいたいが」

夢乃「ええ。きつとね」

井伏「おい、引いてるぞ」

夢乃「まあ、ほんまやわ！きや、おっきい！」

太宰「がんばれ、夢乃！もう少しだ」

井伏「いいぞ、ゆっくりゆっくり」

夢乃「それ！・・・わー、外れてしもた」

太宰「でかかったな！夢乃」

夢乃「ほんに、大きい鯉やった」

阿佐ヶ谷の釣り堀。

夕方を告げる“夕焼け小焼け”の放送。

釣り堀の親父「お客さん、お客さん、閉演時間です。竿上げてください」

津島「いけない、いつの間にか眠ってしまった」

釣り堀の親父「お疲れですか？」

津島「いや、そんなことは」

釣り堀の親父「魚はね、待ってちや釣れませんよ」

津島「あーでもないこーでもない」

釣り堀の親父「その通り、せっかちなくらいに仕掛やポイントを変えないとね。まあ、のんびりしたいだけなら、いいんでしょうがね」

津島「ははは、帰ります。ありがとうございます」

釣り堀の親父「はいはい、またどうぞ」

## ●其の六

今日もにぎわう小料理屋“喜久屋”。

喜子「今日はブリと大根炊いてみたんですよ。美味しいから川端先生も食べてみて」

川端「いただくよ。ほう、これは旨そうだ」

喜子「先生、伊豆の踊子素晴らしかったです。思い出しちゃいましたよ、恋に燃えていた娘時代を」

船越「あつたんですか？女将さんにもそんな時が」

喜子「こら、船越君」

船越「はい」

喜子「あたしがどれだけ殿方にもてたか、見せてあげられないのが残念だわ」

川端「女将さんは今でもお綺麗ですよ」

喜子「まあ先生、ありがとうございます！さすが小説家は女心が分かってらっしゃいますねえ。それに比べて、だからいつまでたっても二流の編集者なのよ」

船越「きつついなあ」

喜子「くやしかったら太宰さん売れっ子にしてみなさいな。いつも喧嘩ばかりして。まったく進歩が無いんだから」

船越「それがね、女将、今日はそのことで川端先生にも来ていただいたんです」

喜子「あらまあ、それはそれは。なにか名案でも？」

船越「それがね」

ガラスと戸が開いて、太宰が入ってくる。

喜子「あら、噂をすれば。太宰さん、いらっしゃい」

太宰「こんばんは、女将さん。やあ、船越君、待たせてすまない」

川端「太宰君、久しぶりだな」

太宰「川端先生、お呼び立てしておいて遅れて申し訳ありません。今日はありがとうございます」

川端「ああ、かまわないよ。私も会いたかったんだ」

船越「女将さん、奥いいかな？」

喜子「ええ、かまいませんよ。どうぞ」

語り「昭和10年、この年に始まった芥川龍之介賞、通称・芥川賞ですが、なんと太宰治も記念すべき第一回目の受賞候補に選ばれていたのです。ところが受賞はならず、選考委員であった川端康成の酷評によって受賞を逃したと感じていた太宰は、編集者の船越を通じて川端にあう段取りをつけたのですが・・・なんとなく、いやな予感が致しますねえ」

奥の座敷。

川端「それで？話というのは芥川賞の件かね？」

太宰治「はい、そのとおりです。噂通り、僕の作品が選ばなかったのは、川端先生のせいなんですよね？」

船越「おい、太宰君！言葉を慎みたまえ！せっかく先生がわざわざ」

川端「いい、いい、思った通りを口にするのは彼のいいところだ」

船越「でも・・・」

川端「だがね太宰君、それは誤解だ。私は公正に判断して石川君の作品に票を投じた。ただそれだけだ」

太宰「へー、そうなんですか。ではなぜ、このような選評を書かれたんですか？」

“作者目下の生活に厭な雲ありて、才能の素直に発せざる憾み（うらみ）あった”、川端先生、僕の何を知ってるって言うですか？僕の生活が乱れていようとなかろうと、作品自体となんの関係があるっていうんですか？納得できるように説明していただきたい」

川端「つまりはそういうところだよ、太宰君」

太宰「・・・なにがですか？」

川端「自分の思い通りに行かないこと、気に入らないことがあれば、平気にかみつこうとする。君は普段は明るくて陽気な男だが、その実、憾みが心（しん）の根っこにある。それが作品に色濃く出ているのが、私は好きじゃないただ。違うか？」

太宰「さあ、わかりませんね。とにかく、川端先生は僕に芥川賞を取らせたくなかった。この事実には僕は決して忘れませんよ。死んでもね」

川端「勝手にしなさい。他に話が無いなら失礼するよ」

太宰「あれ？先生も僕に話があったんじゃないやありませんか？」

川端「余計なお世話だろうが、奥さんを大事にしなさい。まずはパビナールをよしなさい。このままでは中毒から抜けられんぞ」

太宰「先生、ありがとうございます。今日は言ってすっきりしました。お氣をつけて」

出ていく川端。

船越「君、話が違うじゃないか？次こそは受賞できるように川端先生のご機嫌をとっておきたいからというから席を設けたんだ。人の顔に泥塗りやがって・・・裏切り者」

太宰「ごめーん、だってどうしても一言言ってやらずにはおれなくてね。恩に着るよ。ひとつ借りだ。さ、呑み直そう」

船越「君ってやつは・・・」

遊郭。

夢乃「ずいぶん酔うてますなあ」

太宰「ああ、船越のやつにさんざん説教されて悪酔いしてしまった。あいつは悪い奴じゃないんだが、真面目すぎるのがたまに傷だ」

夢乃「そやかて、編集者の人まで太宰さんみたいな人じゃ、いくらかかっても小説なんか仕上がりませんやろ？真面目すぎるくらいが、ちょうどええんと違います？」

太宰「まあな、そうかもしれないが」

中原「太宰！いるのか！？いたら返事しろ！？」

太宰「あん？誰だ、俺の名前を呼ぶ奴は？」

夢乃「あの声はもしかして・・・（窓から下を見下ろす）やっぱり！中原さん、何を騒いではるの？」

中原「夢乃！そこに太宰いるんだろ！？やい、太宰、顔を見せやがれ！」

夢乃「中原さんまでそない酔ってからに・・・あかんあかん、帰りなさい！店に迷惑がかかる！」

中原「なんだ、やっぱりお前は太宰の味方か！？この尻軽女！」

夢乃「あほう！花魁が尻軽じやのうてどうやって商売するんや！」

太宰「よう、中原、どうしたんだ？血相変えて。また女房に叱られたのか？」

夢乃「太宰さん、火に油そそがんというて」

中原「降りてこい、太宰！今日こそ勝負をつけてやる！」

太宰「おもしろい！労咳病みのいじけた詩人野郎！待ってろ！」

階段を駆け下りていく太宰。

太宰「ふー、降りて来てやったぞ、ランボーかぶれめ」

中原「うるさい！貴様、金華楼の雛菊に手を出しやがったな！」

太宰「なんだなんだ、何事かと思えば女の話か。ああ、かわいい尻を追いかけてまわしてやったが、それがどうした？」

中原「くー、あの子は俺が目をつけていたんだ！」

太宰「芸者と遊んで何が悪い！馬鹿か、お前？」

中原「お前だけは許せんのだ！お前だけは！きえー！」

太宰「おりゃー！」

思いつきり、頭をぶつける二人。

太宰「くー、いてえ、頭が割れる・・・（倒れる）」

中原「くそお、太宰、覚えて・・・ろよ・・・（倒れる）」

遅れて来た夢乃。

夢乃「（ハアハア）毎度毎度、子供なんやから！もううち知らん！」

津島教授の研究室。

津島「とまあ、太宰治と中原中也は似たものを感じていたのか、かなり互いを意識していたようなんだ」

谷崎「へー。今もたくさんの人たちに愛されてる作家同士に交流があったなんて、なんだか面白いですね」

文加「そうよね。今でこそ二人とも巨匠！って感じがしてたけど、すごく人間ばいっていうか、親近感が湧きますね」

津島「だろう？そこが現代文学史研究の面白いところなんだよ！」

文加「だけど、まるで見て来たみたいに話されてますけど、かなり津島先生の想像が盛り込まれてませんか？」

谷崎「そうそう、なんだか津島先生によって、文豪たちの威厳がどんどん損なわれていってるような」

津島「それは言い過ぎだろう。よし、今度また夢でも見て考察を深めておくでしょう。今日はここまで」

文加「まったく、太宰治の夢ばかり見てると、帰って来れなくなっちゃいますよ。なんてね」

津島「お、それも悪くないな！」

谷崎「だめだこりゃ」

津島「むふふふ」

## ●其の七

語り「ここは玉川上水の土手、時は昭和23年の6月、新緑むせぶ初夏の幸福を、鳥も虫もそして人間も満喫する季節です。土手沿いの茶屋では、一足早いかき氷の旗がゆらゆらと風になびいているではありませんか。私めもひとつ、あいすいません、氷をひとつ、はいはいありがとうございます！うー、ちべたい！こめかみにキーンと来ましたね。おっと失礼いたしました。さあ、右手上流の方をご覧ください。ここはかの太宰治と愛人の山崎富栄が入水自殺をしたとされる場所です。さてさて二人はここでどんな話をしたのやら。しばし耳を澄ましてお聞き下さいませ」

川の音に混じって、聞こえる虫の声。

太宰「少し冷えて来たね。寒くはないかい？」

富栄「ええ、大丈夫です。太宰さんは？」

太宰「大丈夫だ。ところで富栄、どうだった、人間失格は？」

富栄「ええ、一段と暗い話で。正直、気が滅入ってしまいました」

太宰「そうか、そうか、そりゃ良かった」

富栄「良かった？なにがどう良かったとおっしゃるんですか？」

太宰「わからんか？世の中の間人は、暗い話が好きだろう？君、今回僕はね、とことん暗い小説に挑戦したんだよ。最低だろ？主人公の大庭葉蔵って男は」

富栄「ええ、最低でした。特に友人に自分の妻が寝取られているところを、影からじつと見ているあたりが・・・その場にいたら頬のひとつもひっぱたいてやりたくまりました」

太宰「(笑) 愉快愉快！どんぴしゃ、狙い通り。君もなかなか凡人だねえ」

富栄「凡人で結構です。だけど、読者の人たちは、葉蔵とあなたを重ねてみるはずです。あなた自身の私小説だと」

太宰「だろうね」

富栄「だろうねって・・・いいんですか？そんな風に誤解されても」

太宰「かまわないさ、本が売ればそれで」

富栄「まさかあなたの口から、そんな言葉を聞く日が来るなんて。変わりましたね」

太宰「そりや変わるさ、僕も、時代も。いいかい、富栄、金が無いっていうのはしんどいよ。本当にしんどい。骨身にしみるんだ、明日、女房子供に食わせる米が無いっていうのは」

富栄「それはそうでしょうけど」

太宰「所詮、小説なんてのは読む人が楽しむためのものさ。作者が躍起になって自分を表現したって何の価値もありはしない。やつとそのことに気が付いたんだ、僕は」

富栄「まあ、ご立派。じゃあ、せいぜい世間の方を楽しませてご覧あそばせ」

太宰「ああ、そうするよ。じゃあ、こんなのはどうだ？太宰治、玉川上水で愛人と入水自殺！みんな喜ぶぞ、わいわい言って心中の真相を探ろうとするだろうな。愛人と家庭に挟まれ、悩んだ挙句女を道連れに自業自得の死！なんてさ(笑)」  
富栄「たしかに、本当の事なんてきつとだーれも知らないですよ、この世の中」

太宰「ああ、だーれも知らないよ、僕と君が友情で結ばれた親友だなんてこともさ」

富栄「あるんですね、こんな関係」

太宰「あるんだな、こんな関係・・・男女の仲を超えて、こうやって話が出来る人がある。それは本当に素晴らしいことだと、常日頃僕は気に感謝して」

富栄「あ、ホタル！ほら、太宰さん！（螢を追いかける富栄）待って」

太宰「おい、富栄、危ないぞ、もう暗いから水際に行くのは」

富栄「ほら、見て、太宰さん！捕まえた、源氏螢」

太宰「わかったから、もう上がっておいで」

富栄「もう一匹・・・あ、いた・・・そら！キャー（川に落ちる）」

太宰「富栄！（土手を駆け下りる）・・・富栄ー！くそっ（川に飛び込む）」

通りすがりの男性「・・・おい！誰か、川に落ちたぞー！」

津島の研究室。

津島（中身は太宰）「うあー！（目を覚ます）」

文加「どうしたんですか！？津島先生、大丈夫ですか！？」

津島（太宰）「富栄！富栄、大丈夫か！？富栄・・・あれ・・・ここは？」

文加「ふー、また夢ですか？本当にいい加減にしてください。大丈夫ですか？あーあーもう、資料にお茶がこぼれて・・・先生？津島先生？大丈夫ですか？」

津島（太宰）「ん？なんだ、この服は？・・・おかしい、なんだここは？・・・たしか僕はさつきまで富栄と玉川上水の土手で・・・おい、君、今は昭和23年だよな？」

文加「いいえ、違います。令和2年です」

津島（太宰）「令和？なんだ、それは？・・・もしかしてこれは・・・時間移動？」

文加「時間移動？津島先生、何をおっしゃってるのか良く分らないんですが？」

津島（太宰）「待て待て待て！どうして君は僕の本名を知ってるんだ！？」

文加「はあ？・・・ご研究が忙しすぎて、寝不足でどうかされたんですか？」

津島（太宰）「そうじゃないよ、いいか、良く聞けよ・・・僕の名前は太宰治で、津島っていうのは僕の本名だ」

文加「太宰治！？・・・救急車を（電話をしようとする）」

津島（太宰）「ちよっと待って待って！」

文加「長年、太宰治の研究をされてるとはいえ、ついにご自分の事を太宰だなんて・・・可哀そうな先生・・・大丈夫ですよ、少しゆっくりお休みになればきつと」

津島（太宰）「ちよっと、君！・・・すまないが、眼鏡を外してはくれないか？頼む、ちよっとだけ」

文加「・・・眼鏡ですか？いいですけど・・・こうですか？」

津島（太宰）「うああ・・・良かった、生きてたか！（抱きしめる）」

文加「ちよっと、教授！やめてください！離して！（突き飛ばす）」

津島（太宰）「うわ！・・・いててて、何するんだよ、富栄」

文加「富栄！？」

玉川上水の土手。

太宰（中身は津島）「うわー！」

富栄「太宰さん、大丈夫！？あー、良かった、助かったあ」

太宰（津島）「どうしたんだ！？ここはどこだ？うー、寒い、着物がびしょびしょだ・・・着物？・・・わー、なんでこんなもの着てるんだ？うわ！あんた誰！？」

富栄「誰って、富栄ですよ」

太宰（津島）「富栄？・・・富栄って・・・もしかして、太宰と玉川上水で心中したあの富栄？」

富栄「心中？いやな事言わないでください！ちよつと足を滑らせて川に落ちただけなのに。どうしたっていうの？川底に頭でもぶつけたのかしら？しつかりして、太宰さん！」

太宰（津島）「太宰！？・・・むむむ・・・あの、もしかしてここは」

富栄「玉川上水よ」

太宰（津島）「えー！？」

通りすがりの男性「おい、あんたたち大丈夫か！？」

富栄「はい・・・」

太宰「ん？待てよ・・・あ、そうか、これは夢だ！なんだそうかそうか、ははははは！じゃあゆつくりこの時代を楽しむとしよう。おじさん、ありがとうございます。では」

通りすがりの男性「おいおい、ずぶ濡れじゃねえか？俺の家はすぐそこだから、着替えたらどうだ？」

太宰「いいえ、夢なので大丈夫です」

通りすがりの男性「夢？何を言ってるんだ、お兄さん」

太宰「いいですいいです、お気になさらず。さあ、富栄、色々聞かせてくれ。わははは」

富栄「ちよつと、太宰さん！すみません、ありがとうございます。太宰さん、待って！」

通りすがりの男性「変な奴らだなあ・・・」

## ●其の八

語り「好きが高じて、まさかまさかのタイムスリップ！？いえいえ、見た目はそのままに中身だけが入れ替わり、津島が太宰に、太宰が津島に！二人同時に内面世界と時間までも交換してしまったインナータイムスリップ！とても名付けておきましょう！はてさて、ところ変わって、ここは現代の縁恩大学、人類工学科・脳科学部助教授の正木凜教授の研究室でございます。なにやら得体のしれない機械が所狭しと並んでおりますが、いったい何が始まりますやら」

文加「すみません、正木教授、お忙しいところ変なお願ひして」

正木「いいわよ、なんだか面白そう。津島教授、座って」

津島（中身は太宰）「・・・」

正木「津島教授！あ、そうか」

文加「はい、ご自分を太宰だと思ってるので」

正木「くくく、うけるー！じゃあ、太宰さん、こちらへどうぞ」

津島「あ、はいはい。ここでいいですか？」

正木「はい、どうぞ。これを腕につけて、こちらは頭のほうに、ちょっと失礼」

津島「へー、これで僕が太宰だと証明できるんですね？わくわくするなあ」

正木「ポリグラフ、またの名をウソ発見器。私もわくわくするー！（笑）」

津島「（笑）楽しい人だなあ。この後、飯でも行きませんか？僕がよく行く“喜久屋”って小料理屋のおでんが絶品で・・・あ、ここには無いのか」

正木「だったら私の行きつけのワインバーにでも行きましょうよ。ワインはお嫌い？」

津島「ワインかー、浅草の神谷バーで飲んで以来だな。行きます行きます！あ、あのお名前は？」

正木「正木。正木凜よ」

津島「凜さんか。白衣を着てるけど、何か研究でも？」

正木「ええ、脳科学。だから山科さんが私に相談してきたのよ。津島先生の頭がおかしくなっちゃったーって（笑）」

津島「だから僕は太宰なんだって」

正木「わかったわかった、はい準備OK。質問を始めるから気持ちを落ち着かせて。いい？」

津島「わかりました。どうぞ」

静かに響く機械音。

正木「山科さん」

文加「はい・・・」

正木「彼はどうやら、本物の太宰治のようね」

文加「えー！？うそー！」

津島「ほーら、だから言っただろ？ねー、凜ちゃん！」

文加「凜ちゃんって・・・」

正木「少なくとも彼はこれっぽっちも嘘をついてないわ。自分の事を太宰治だと確信してる、ということとは」

文加「ということとは？」

正木「病院へ連れて行きますよ」

津島「ちよっと待った待った！本物だって言ったばかりだろ？どうして病院なんだい？僕は行かないよ。どこもおかしくなんかない！」

正木「じゃあどうするの？このままってわけにはいかないでしょ？」

文加「困りましたね・・・」

津島「困ったね・・・おい！それよりさっきから君たちが話してる本物の津島

修ってやつはどこに行ったんだ!?!?!もしかして、彼が僕の代わりに玉川上水で富栄と?」

文加「え?」

語り「太宰の心配をよそに、インナータイムスリップした津島修はといいますと、なんと昭和23年の喜久屋におりました!13年分年をとった人々に囲まれて」

太宰(中身は津島)「は、は・・・はーくしょん!」

船越「大丈夫か?太宰さん。何ゆえに玉川上水なんぞに飛び込んだりしたんだ。悪ふざけもたいがいにしたまえよ」

富栄「すみません、私がいけなかったんです。蚩になんか夢中になって・・・」

喜絵「まったく、いくつになつてもやんちゃよねえ。いい加減落ち着いたらどうなの?なーんて、母ちゃんが生きてたらきつとそういうわね」

船越「違うない。喜子女将が亡くなって4年?5年?」

喜絵「6年よ。もう七回忌がくるもの。早いわー」

船越「早いなあ。女将にはよく太宰さんと二人で怒られたっけ」

喜絵「覚えてるわよ。私もまだ15で、時々店を手伝わされてたじゃない?よく二人で喧嘩してましたよね。子供みたいに(笑)」

船越「だってこいつが、おっと失礼、太宰先生がやたらからむんでね。楽しそうに大笑いしながらさ」

喜絵「そうそう、喧嘩は僕のスキンシップだ!ってよく言ってたわよね」

船越「相手するこっちはたまったもんじゃない(笑)」

富栄「へー(笑)」

太宰「ふふふ、やっぱりそうか」

富栄「なにがやっぱりなの?」

太宰「太宰治はやっぱり陽気な男だったんだ。悪ふざけ、やんちゃ、大笑い、現代に浸透している彼のイメージとはまるで違う!」

船越「何を一人でぶつぶつ言ってるんだ?」

太宰「いや、別に・・・ところで船越さんでしたっけ?」

船越「ああ・・・なんだか俺を忘れちゃったような口ぶりだな」

太宰「すみません・・・あの、ちよつとお聞きたいのですが、太宰は、あ、いや、私はもう“人間失格”は発表しましたっけ?」

船越「ますますおかしなやつだな。ああ、出版したよ。君にとって一番の人気作じゃないか。本当に大丈夫か?」

太宰「大丈夫です、大丈夫です!そうか、書かれているか。それで、船越さんはどう思います?人間失格。編集者として」

船越「そうだな、俺は・・・嫌いだ」

富栄「嫌い？」

船越「ああ。嫌いだ・・・何か嫌な気配がする。不吉な予感というか、渡るべからずな橋を君が渡ってしまったような・・・いや、あくまでも私感だ。本は売れているから文句はない、ははははは・・・」

喜絵「商売繁盛で何よりね。さ、もう一本つけましょ」

船越「ありがとう」

太宰「・・・」

店を出て夜の街を歩く太宰と富栄。

太宰（中身は津島）「渡るべからずな橋か・・・確かにそうなのかもしれない」

富栄「何が？」

太宰「創作っていうものは、ある作者にとってはきっと、魂の切り売りなのかもしれないね」

富栄「魂の切り売り・・・じゃあ、売切れちゃったらどうなるんですか？また仕入れてくればいいのかしら、魂を」

太宰「そう出来ればいいんですけど」

富栄「魚や野菜じゃありませんものね。仕入れられなかったらどうするんですか？」

太宰「うーん・・・店じまい、ですかね。廃業か、転職か、または・・・」

富栄「店じまい・・・悲しい響きですね」

易者が声をかけてくる。

易者「旦那さん。そこを行く旦那さん」

太宰（中身は津島）「・・・私ですか？」

易者「ええ、あなたです」

太宰「・・・何か？」

易者「こちらへ来てお坐りなさい。見てあげましょう」

富栄「結構です。易にはあまり興味ありませんから。行きましょう、太宰さん」

易者「待ちなさい。悪い相が出ています。とにかくここに」

太宰「悪い相って・・・何かまずい事でも起きるんですか？」

富栄「放っておきましょう、辻の占い師なんてあてになるものですか」

易者「奥方ですか？」

太宰「・・・いいえ、違いますけど」

易者「その方はすでにお亡くなりになっていますよ。お気づきじゃありませんか？」

太宰「・・・え!？」

のら猫が鳴いている。

太宰（中身は津島）「どういう事ですか？彼女が亡くなってるだなんて」

易者「旦那さん」

太宰「はい・・・」

易者「あなた、この世界の人間じゃありませんね」

太宰「この世界？・・・ここって、僕が見てる夢の世界なんですよね？」

易者「やはり・・・あなたは何か考え違いしてらっしゃる。ここは紛れもない現実世界。昭和23年の6月12日。あなたは、そのお体の持ち主と内面世界が入れ替わってしまったようですね」

太宰「内面世界が入れ替わった？・・・じゃあ本物の太宰治は」

易者「はい、おそらく本当のあなたが暮らす世界におられるでしょう」

太宰「どうしてそんなことに」

易者「彼女に頼まれたんです。太宰治を死なせないでくれって」

太宰「富栄さんが!？いったいどういうことですか!？」

易者「いいでしょう。何もかもお話ししましょう。いいですね？富栄さん」

富栄「・・・わかりました（泣）」

大学の図書室。

文加「ほら、ここを見てください。このページ」

津島（中身は太宰）「わ、この写真、我ながら暗くてやだなあ、どこを見てるんだよ、まったく・・・なにになに・・・本当だ、昭和23年6月13日、太宰治は愛人の山崎富栄と玉川上水にて入水自殺・・・なんだこれ・・・何も知らないくせに勝手な事を!あれは事故だ!川で足を滑らせた富栄を助けようとして、それで・・・ちくしょうめ!」

文加「ね?だからもう太宰治はいないんです。あなたは津島修、この大学の教授なんですよ!お願いだから、思い出してください・・・」

津島「そうは言っても僕は本当に・・・そうだ、行ってみよう!」

文加「行くって、どこへ?」

津島「玉川上水だよ。ここですごくしていてもしょうがない。あそこに行けば、何かわかるかもしれない（飛び出していく）」

文加「ちよっと!待ってください、津島先生!」

津島「戻ってくる）とつととと・・・ごめん、玉川上水ってどうやっていくの?」

文加「もう!」

辻の易者。

富栄「嘘ついてごめんなさい！・・・私が・・・私がお願いしたんです。太宰さんを助けてくださいって」

太宰（中身は津島）「頼むって、いったい誰に」

易者「私にですよ」

太宰「・・・あなたはいったい？」

易者「申し遅れました。わたくし、死神と申します」

太宰「死神！？ちよつと、死神がなんだって・・・」

易者「驚くのも無理ありません。ですがいきなり死神の姿で現れたりしたら、もっと驚かれたことでしょうから、こうして辻の易者になりすまし、ご説明に上がった次第です」

太宰「はあ、それはご丁寧に・・・それで？」

易者「はい。富栄さんは先程、玉川上水の土手で足を滑らせてお亡くなりになりました」

太宰「そんな・・・」

易者「本物の太宰治も、彼女を助けようと川に飛び込みました。しかしすでに富栄さんは息を引き取っていました。そして、あいにく彼も泳ぎが下手で、もう少しで死んでしまうところだったんです。しかし先に死んでしまった富栄さんが死神の私を見つけて、こう言って来たんです」

・・・再現・・・

富栄「死神さん、お願いします！太宰さんを、太宰さんの命を助けてください！あの人はまだまだこれからたくさんの小説を書かなくてはいけない人なんです！もつともつとやらなくてはいけないことがあるんです！だからどうか、どうか太宰さんを・・・」

死神（易者）「困りましたね、ここで二つの命を回収することは決定事項なんですよ」

富栄「じゃあどうしたら？」

死神「うーん・・・そうだ、ひとつだけ方法があります」

富栄「それはどんな？」

死神「彼が転生した先の人物の命をいただければ、太宰治を助けることは可能です」

富栄「本当ですか！」

死神「ただし」

富栄「ただし・・・なんですか？」

死神「あなたは二度と太宰治には会えない。なぜならば、彼と転生先の人物とで、

内面世界は交換されてしまいます。姿はそのままでも、そこにいるのはすでにあなたの良く知った太宰治ではないのです。それでもかまいませんか？」

富栄「・・・はい、かまいません。彼が生きていけるのであれば」

死神「分かりました。1日だけ猶予を差し上げます。その間に代わりに死んでいただける方によく説明をして、死ぬ覚悟をしていただいてください。事情も知らずいきなり死んだのではあまりに可哀そうですね。では手続きを、ちやちやのちやつと・・・はい、これで大丈夫です。それではあの世でお待ちしています。ごきげんよう」

・・・・・・・・・・・・・・・・

易者「とまあ、そういう事ですので、よろしく願いします」

太宰（中身は津島）「よろしくって！・・・だけどそうか、私は太宰治の転生した命だったんだな、だからこんなにも太宰治への興味が・・・あー、だけど身代わりに死ぬのはちよつとあまりにも・・・」

易者「富栄さんがなかなか言い出せない様子でしたので、代わってご説明に上がりました。

それではこれにて。お代は結構です」

太宰「え・・・」

易者「あ、そこのご主人、いかがですか？占ってはみませんか？お悩み解決いたしますよ」

通りすがりのご主人「手相か。じゃあひとつ見てもらおうか」

太宰「・・・行きましょう」

### 令和8年の玉川上水の土手。

文加「ここですね、玉川上水って。太宰治が亡くなった土手ってどのあたりなんだろう・・・」

あ、危ないですよ！急に渡ったりしちゃう！

トラック運転手「（急ブレーキの音）バカヤロー！死にてえのか！？気をつけろ！（走り去る）」

津島（中身は太宰）「柵があって入れないなあ・・・あ、あの辺からなら行けそうだ。行こう、文ちゃん」

文加「ちよつと、もう勝手なんだから！・・・でも本当に別人みたい、文ちゃんだって、うふふ・・・あ、馬鹿馬鹿・・・先生、待って！」

### 昭和23年6月13日の土手。

太宰（中身は太宰）「昨日の話が本当なら、今日ここで私は死ぬわけか・・・」  
富栄「ごめんなさい・・・今さらながら、何て馬鹿なことしたんだろうって・・・本当にごめんなさい（泣）」

太宰「・・・しかない天気ですね・・・あっちはどんな日ですかね・・・」

### 令和8年の土手。

津島（中身は太宰）「しっかし、いい天気だなあ。雲一つないや」

文加「先生――！大丈夫ですか！？」

津島「ああ、大丈夫だ！」

文加「何かありますか？」

津島「いや、何も・・・しかし、まさかあんな死に方するなんてなあ。しかも勝手に入水自殺だなんて勘違いされて・・・でもまあ、いいか、それでもっと本が売れたなら・・・僕はどうして小説なんか書いてるんだろうな。真っ当に働けばいいものを。一生懸命働いて、家族を養って、仕事で疲れていればすぐに眠れるだろうから、おかしな薬に頼ることも無かっただろうし・・・僕はどこかで間違っちゃったのかなあ・・・だけど、何十年後にも自分のファンがたくさんいたわけだし、あながち間違っていないかったのかもな、ふふ」

文加「先生、そんなところに座りこんじゃってどうしたんですか！？具合でも悪いの！？今、そっち行きますね！」

津島「大丈夫だ。滑るから気をつけたまえよ」

文加「はい」

### 昭和23年6月13日の土手。

富栄「ごめんなさい！私、もう一度死神さんをお願いします！元のままでもいいって（土手を駆け下りていく）」

太宰（中身は津島）「わ！富栄さん、何を！待って！待つんだ！（追っかける）」

富栄「えい！（川に飛び込む　ざっぱーん！）」

太宰「富栄さん！（追っかけて飛び込む　ざっぱーん！）」

### 令和8年の土手。

津島（中身は太宰）「気を付けて、おい、何やってるんだ！？」

文加「わわわ・・・やだ、うわ、止まらない、キャー！」

津島「君！手を！」

文加「助けてー！（川に落ちる　どっぽーん！）」

津島「馬鹿野郎！くそ！（川に飛び込む　ずっぱーん！）」

三途の川の中。

津島（中身は太宰）「おい、君！文ちゃん、どこだ！？どこにいる！？」

太宰（中身は津島）「富栄さん！手を、私の手をつかむんだ！富栄さん！」

津島「誰だ！？僕の手をつかむのは！？」

太宰「わ！富栄さんじゃないのか！？・・・あなたいったい？・・・もしや、あなた太宰治！？」

津島「なぜ僕だと？そうか、君は津島修か！？大学教授の」

太宰「そうです！わー、まさか本物に会えるなんて！握手してもらっていいですか！？」

津島「そんな場合かね！？だが君、悪かった・・・というわけか、君と僕は中身が入れ替わっちゃったらしい」

太宰「はい、お蔭で太宰さんの代わりに今から死ぬところです」

津島「いや、僕が死ぬから安心したまえ」

太宰「え？でも、いいんですか？」

津島「当たり前だろう？君が死ぬ理由なんてこれっぽちもないじゃないか。だがどうしたらいいだろう？何をどうすれば元に戻せるのか」

太宰「その事でしたら」

死神（易者）「おやおや、ご対面ですか？」

太宰「死神さん！」

津島「死神？ははん、さては貴様の仕業だな。ここはいったいどこなんだ？」

死神「ここは三途の川の水中です」

津島「三途の川だと？」

死神「はい。それでお決まりになりましたか？どちらがお亡くなりになるか。先程、富栄さんにくれぐれもと頼まれてましてね。彼女は先にあの世に逝かれましたよ」

津島「富栄が・・・そうか」

死神「私はどちらでも構いませんよ。予定の数の命を回収できれば」

津島「僕が死ぬよ。あの時、僕と富栄は川に落ちて死んだんだ。僕の資料にもそう書かれていた。心中なんてのは心外だが、僕が死んだことに間違いはない。そうだろ？津島先生」

太宰「はい、その通りです。残念ですが」

津島「どうだった？僕の人生は？」

太宰「感動しました。ほんの少しの間でしたが、大好きな小説家の日常にじかに触れることが出来るなんて、まさに奇跡です！」

津島「それはよかった。僕もこっちに来てみて良かったよ」

太宰「どんなところがですか？」

津島「僕の本がずっと愛されてることを知ったからね。図書室にずらっと並んだ僕の本を見た時、とても嬉しかったんだ」

死神「そろそろお時間です。よろしいんですね？最初の予定通り、太宰様がお亡くなりという事で」

津島「ああ。そうしてくれ」

死神「了解しました。では参りましょう。ご案内します、こちらです」

津島「じゃあな、先生。さよならだけが人生だ、グッド・バイ」

太宰「・・・グッド・バイ」

令和8年の土手。

パトカーや救急車の音とざわついた人垣。

津島（中身も津島）「うわあ！ゲホッ、ゴホッ・・・」

警官「気が付きましたね！（無線に向かって）溺れた男性、意識を回復しました。命に別状はない模様。念のためこれから救急病院に搬送します」

文加「先生！」

津島「おう、山科君か！どうした？ずぶ濡れじゃないか！？」

文加「元に戻ったのね？良かった（抱きつく）」

津島「おい、山科君、人が見てるよ、ほら・・・参ったなあ」

大学の津島の研究室。

津島「いいか？この“グッド・バイ”という作品は、昭和23年に書かれた作品だが、絶筆となっていて未完の名作なんだぞ。つまり太宰の遺作だな。遺書だなんていう研究家もいてだな」

谷崎「私、それ好きです！グッド・バイ”。それまでにない明るい感じの文体で、ほとんどコメディ？って雰囲気ですよ」

津島「そうなんだよ！まさにその通り！」

文加「井伏鱒二が訳した漢詩ですよ、サヨナラだけが人生だって、一文」

谷崎「一度は仲たがいの井伏鱒二の文章を、どうしてわざわざ引用したんでしょうね？」

津島「そうだね、たぶん」

文加「たぶん？」

津島「釣りを教わったり、酒を酌み交わしたり・・・やっぱり、好きだったんだろうな。井伏鱒二の事が」

谷崎「ふーん、そんなもんですかね？」

津島「そんなもんさ」

・・・回想・・・

井伏「釣りには気が短いほうがいい。釣れないでじっと待つより、あーでもないこーでもないで試行錯誤する方が上手くいくものだ。ある意味小説と相通ずるものがある」

太宰「へー、なるほどねえ。あーでもないこーでもないか」  
井伏「そう。あーでもないこーでもない（笑）」

おしまい